

原点のまち 串本

明治二十三年（一八九〇年）

九月十六日、トルコ軍艦

エルトゥールル号が檜野崎沖で

遭難し、五八〇余名の尊い命が

失われました。

このとき生存者の救難に

あたった檜野地区との縁が

原点となり、現在でもトルコ

共和国と串本町・日本との

友好関係が続いています。

トルコ

日本

友

好



ご 挨拶

和歌山県串本町長 **田 嶋 勝 正**



1890（明治23）年9月16日、日本への親善使節団を乗せたトルコ軍艦「エルトゥールル号」が台風に遭遇し、当町の紀伊大島沖で座礁、沈没しました。島民たちの懸命の救助活動と看護にもかかわらず生存者は僅か69名で、587名もの将士が死亡するという未曾有の海難事故となりました。

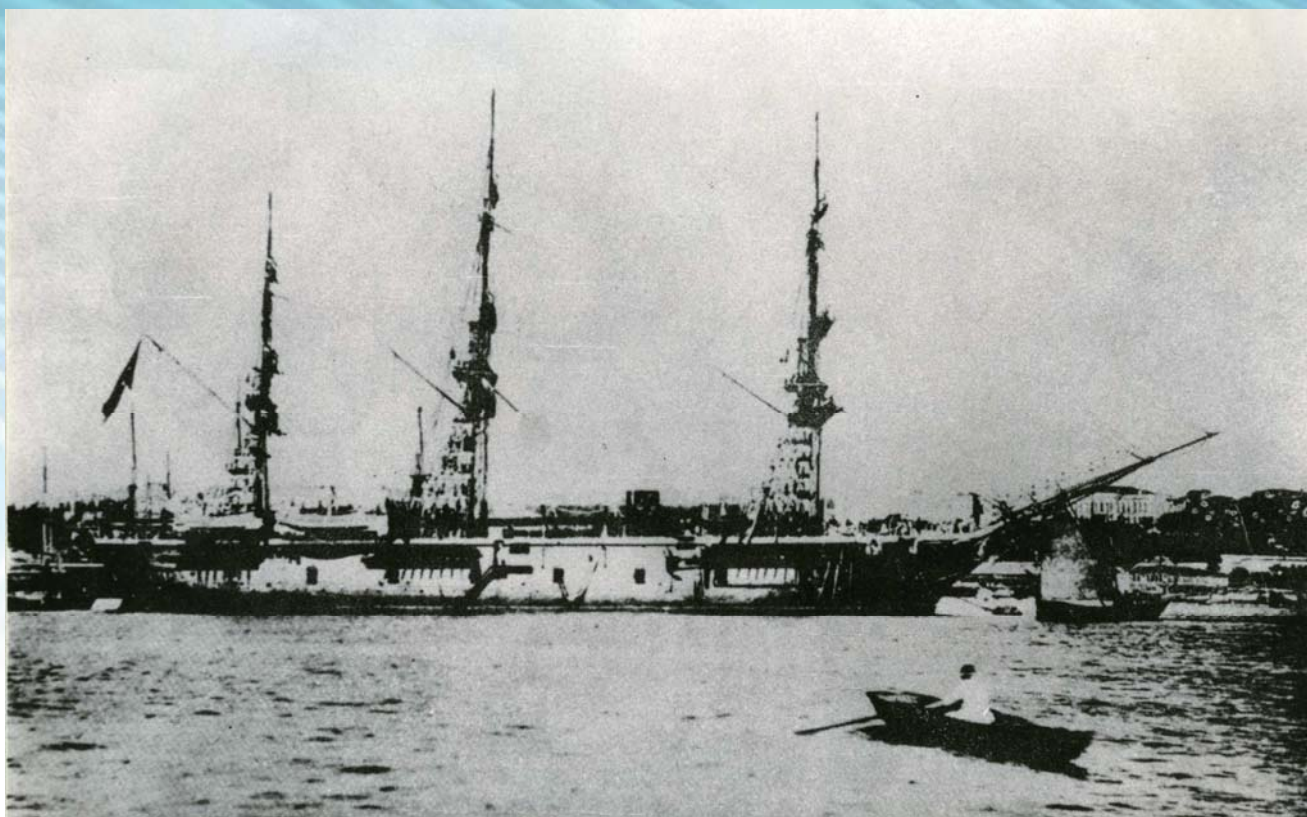
このエルトゥールル号の遭難事故は誠に痛ましい出来事でしたが、大島島民の献身的な救助活動はトルコ国内で世代を超えて語り継がれ、両国の友好関係の礎となりました。その友好関係は様々な分野に広がり、120年以上を経た現在も多くの人々の心に受け継がれております。

当町では5年に一度開催されるエルトゥールル号の追悼式典を始め、トルコの姉妹都市との青少年交流など、両国の友好関係をさらに深化させるため様々な取り組みを行っており、また地元の大島小学校では子どもたちが定期的に慰霊碑の清掃を行い、「追悼歌」を歌い継いでいます。さらに現在、エルトゥールル号のエピソードを映画化（2015年公開予定）するプロジェクトが進められております。今後も微力ではありますが、私たちは本州最南端の地より両国の友好関係の発展に貢献してまいりたいと考えております。

皆様には、海を越えて結ばれる私たちの誇れる「絆」についてご理解をいただき、今後の両国の友好関係にお力添えをいただければ幸いです。



1. トルコ軍艦 エルトゥールル号



イスタンブールの港に停泊中のエルトゥールル号

19世紀末、ヨーロッパ列強との不平等条約に苦しんでいたオスマン・トルコ帝国皇帝アブデュルハミト2世は、明治維新後同様の立場にあった日本との平等条約締結の促進と、1887年(明治20年)の小松宮彰仁親王殿下のトルコ訪問に対する返礼などの目的で、親善使節団の派遣を計画しました。団長には、エミン・オスマン海軍大佐(日本への航海中に提督“パシヤ”となり、オスマン・パシヤと呼ばれた)が選ばれ、使節団座乗艦としてフリゲート艦エルトゥールル号の派遣が決定しました。

1889年(明治22年)7月14日、650余名の乗組員を乗せ、イスタンブールの港を出港したエルトゥールル号は、途中各地のイスラム教国に立ち寄りながら11ヶ月をかけて1890年(明治23年)6月7日に横浜港へ到着しました。



オスマン・パシヤ

2. 嵐の海へ

横浜到着後、オスマン・パシャは明治天皇に謁見し、オスマン・トルコ皇帝より贈られたトルコ最高勲章や種々の贈り物を捧呈。使節団は東京に3ヶ月滞在し、日本の国賓として官民を挙げての熱烈な歓迎を受けました。

そして1890年(明治23年)9月15日、一行は横浜港を出港し帰国の途につきました。日本国側は9月が台風の季節であり、またエルトゥールル号が建造後26年を経た木造船であることから、出発を見合わせて船体の修理を行うように勧めましたが、オスマン・パシャはこの日に出港する決定を下しました。



エルトゥールル号乗組員

横浜港を出た翌日の9月16日、エルトゥールル号は和歌山県串本町の紀伊大島沖を航海していましたが、同海域において折からの台風に遭遇、猛烈な波浪と強風のために航行の自由を失い、次第に紀伊大島東端の檜野崎に寄せられ、古より船乗りたちに恐れられた船甲羅(ふなごうら)岩礁に激突しました。船体破損部から流入した海水が蒸気機関の爆発を引き起こし、艦は二つに折れ沈没。オスマン・パシャ以下587名が殉職、生存者わずか69名という大惨事となりました。

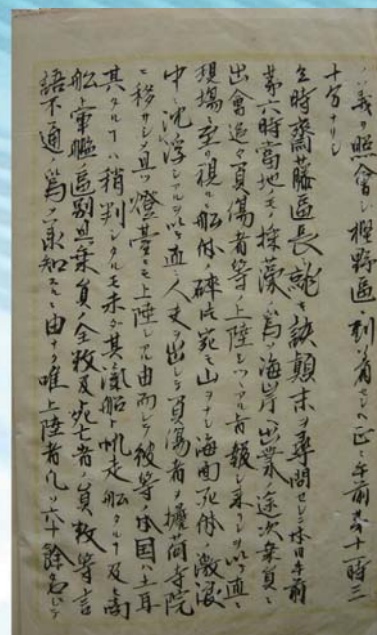


エルトゥールル号沈没現場

3. 大島島民、懸命の救助活動



沖周・大島村村長



沖村長の日記



神戸の病院で手当てを受けたエルトゥールル号の乗組員たち

当時、紀伊大島には大島・須江・檜野という3つの村があり、島全体の戸数は約400戸でした。食料の蓄えも僅かな貧しい暮らしをしていた島民たちでしたが、この未曾有の海難事故に際し、不眠不休で救助活動を行い、非常用食料を供出して生存者の介護に努め、また殉職者の遺体捜索・引き揚げ作業にあたりました。また、日本全国から多くの義捐金や物資が寄せられました。

その後、69名の生存者は更なる治療を受けるため神戸に移送され、明治天皇は彼らのために侍医を派遣、皇后陛下は看護婦13名を神戸へ遣わされ、彼らに白衣を賜りました。

4. 生存者、祖国へ送還



イスタンブールに到着した軍艦金剛



比叡・金剛の乗組員

69名の生存者は神戸で治療を受けた後、同年10月5日、日本海軍の2隻の軍艦（比叡・金剛）により帰国の途につきました。翌1891年（明治24年）1月2日、2隻は無事イスタンブールに入港、トルコ国民は心からの感謝の念をもってこれを迎えました。この「エルトゥールル号遭難事件」は、日本とトルコの友好のシンボルとしてトルコ国内で今も語り継がれています。

5. 殉難将士の追悼



事故の翌年に整備された共同墓地

事故の翌年2月には、沈没海域を眼下に見下ろす檜野崎の丘に殉難将士の共同墓地が整備されました。墓地には慰霊碑と和歌山県による「土国軍艦遭難之碑」が建立され、1928年(昭和3年)8月6日には、大阪日ト貿易協会の発議で遭難追悼祭が催されました。



檜野崎に行幸された昭和天皇

また1929年(昭和4年)6月3日には、昭和天皇が紀南地方への行幸の際に檜野崎へ立ち寄られ、慰霊碑をご参詣されました。

TOPICS

エルトゥールル号乗組員の手当を行った紀伊大島の医師3名がトルコ国へ送った手紙の写しが、最近、地元のお寺で発見されました。(トルコ国からの「治療に要した費用を請求するように。」との連絡に対し、)医師たちは「初めからお金を請求するつもりはない。痛ましい遭難者を只々気の毒に思い行ったこと。そのようなお金があるなら遭難者への義捐金に充ててください。」との返信を行っていました。当時の島民たちの気骨な精神をこの手紙からも感じることができます。



発見された医師の手紙

6. 新慰霊碑の建設



建設中の慰霊碑

トルコ政府から建設費用が拠出され、委託を受けた和歌山県が設計・施工・監理にあたり、この慰霊碑は1937年（昭和12年）に完成しました。同年6月3日に除幕式が執り行われ、併せて50周年追悼祭が開催されました。



昭和12年6月3日に除幕式が行われた慰霊碑

（写真の人物はエルトウルル号乗組員の第一発見者の高野友吉氏）



現在のエルトウルル号慰霊碑

7. 未来へつなぐ記憶



120周年追悼式典(平成22年6月3日)



120周年追悼式典(平成22年6月3日)

このエルトゥールル号慰霊碑では、第二次世界大戦中には一時的に中断したものの、駐日トルコ共和国大使館との共催で5年ごとに追悼式典が開催されています。

1974年(昭和49年)には、トルコ共和国との友好と、国際的な友愛の精神を広く伝えることを目的として、エルトゥールル号慰霊碑の近くにトルコ記念館が建設されました。館内には沈没したエルトゥールル号の模型や遺品、当時の写真などが展示されており、遭難事故当時の様子を知ることができます。



トルコ記念館

8. 深化する友好関係

エルトゥールル号の事故の悲劇を機に殉難将士の慰霊を通じて串本町とトルコ共和国との交流が始まり、1964年(昭和39年)11月に黒海沿岸のヤカケント町と、1975年(昭和50年)10月に地中海沿岸のメルシン市と、それぞれ姉妹都市縁組を結びました。



メルシン市に建設された慰霊碑



沈没海域での遺品引き揚げ作業

エルトゥールル号の沈没海域では、これまでに何度か遺品の引き揚げ作業が行われてきました。最近では2008年(平成20年)からトルコの海洋考古学研究所が中心となって作業が行われており、これまでに7000点以上の遺品が引き揚げられました。これらの遺品は腐食を防ぐ保存処理が行われた後、樺野崎のトルコ記念館に随時展示される予定となっています。

TOPICS

イラン・イラク戦争下の1985年(昭和60年)3月17日、イラクのフセイン大統領が突如「48時間の猶予期限以降はイラン上空を飛ぶ航空機は民間機であっても無差別に攻撃する。」との声明を発表しました。イラン在住の外国人は一斉に出国。日本人も出国を試みますが、各国の航空会社が自国民を優先して搭乗させていたため、日本人はチケットを持っても飛行機に乗ることができませんでした。日本からの救援機も来ず、3月19日、215名の日本人が絶望的な気持ちでテヘランのメヘラバード空港に取り残されていたところ、2機のトルコ航空機が降り立ち、タイムリミット直前で日本人全員を救出してくれました。なぜトルコが危険を冒して日本人を救出してくれたのか、日本政府も日本のマスコミも全く分からなかったのですが、後日、駐日トルコ大使から次のようなコメントが発表されました。「私たちは、エルトゥールル号の借りを返しただけです。」



トルコ航空が救援機として派遣した
DC10 型機(写真提供: Turkish Airlines)

友好の歴史年表

西暦	年 月 日	出 来 事
1890	明治23年 9 月16日	トルコ軍艦エルトゥールル号 紀伊大島樫野崎沖で沈没
1929	昭和 4 年 6 月 3 日	昭和天皇 樫野崎行幸
1937	昭和12年 6 月 3 日	トルコ軍艦遭難慰霊碑除幕式挙行
1964	昭和39年11月11日	串本町とヤカケント町が姉妹都市縁組
1972	昭和47年 6 月23日	樫野崎の遭難慰霊碑と同型の慰霊碑がメルシン市に建設される
1974	昭和49年12月14日	トルコ記念館竣工式
1975	昭和50年10月 8 日	串本町とメルシン市が姉妹都市縁組
1985	昭和60年 3 月19日	イラン・イラク戦争中、テヘランのメヘラバード空港に取り残された日本人 2 1 5 名をトルコ航空機が救出
1990	平成 2 年 6 月 2 日～ 3 日	エルトゥールル号遭難 1 0 0 周年追悼式典開催、セムラ・オザール大統領夫人来町
1994	平成 6 年 9 月28日 ～10月11日	姉妹都市との青少年相互訪問事業がスタート 串本町から高校生 6 名・引率者 1 名がメルシン市を訪問
1996	平成 8 年12月14日	メルシン市の市街地に「串本通り」ができる
2000	平成12年 6 月 3 日～ 4 日	日本・トルコ友好 1 1 0 周年記念式典開催、三笠宮寛仁親王殿下らが出席、トルコ海軍フリゲート艦トゥルグットレイス号が来航
2005	平成17年11月11日～12日	日本・トルコ友好 1 1 5 周年記念式典開催、高円宮妃殿下が出席
2008	平成20年 1 月 6 月 7 日	トルコ海洋考古学研究所などによるエルトゥールル号遺品の引き揚げプロジェクトがスタート アブドゥッラー・ギョル大統領が串本町を訪問、樫野崎にて記念式典を開催
2010	平成22年 6 月 3 日 9 月 2 日	日本・トルコ友好 1 2 0 周年記念式典開催、三笠宮寛仁親王殿下、彬子女王殿下らが出席 「2 0 1 0 年トルコにおける日本年」事業の一環として、メルシン市においてエルトゥールル号 1 2 0 周年慰霊式典、エルトゥールル号遺品里帰り展、串本通りパレードなどが行われる
2011	平成23年 3 月27日	イラン・イラク戦争時に日本人を救出したトルコ航空機の元機長オルハン・スヨルジュ氏が来町
2014	平成26年 1 月 7 日 2 月22日	レジェップ・タイイップ・エルドアン首相が来日、都内で串本町長や救助者末裔らと面会 元トルコ航空機長オルハン・スヨルジュ氏（2 0 1 3 年 2 月 2 4 日死亡）の追悼式典「友好のともしび」を樫野崎で開催



製作：串本町役場

〒649-3592 和歌山県東牟婁郡串本町串本1800

TEL.0735-62-0555

<http://www.town.kushimoto.wakayama.jp/>